

BLUE SOCKS 2020

特集

VOL.3

誰もが日本一を目指した！ブルーソックスの原点、発足当時のイズムを21年前に決行したカナダ遠征から色褪せない今を振り返る。

BATTLE in CANADA より 1998.10

カナダ遠征



BLUE SOCKS

1998

監督

亀龍憲司

supervision

カナダ遠征総括 亀龍憲司監督

我がブルーソックスも10周年を目前に控えやっと初の海外遠征を敢行しました。出発するにあたって、まず立てた目標は（勝って自信をつける事です。そして、しっかりとした大会に十二分に気を使いました。なぜなら試合に勝っても負けても良かったねと言う試合では、その意義や目的がぼけてしまい、絶対に明日につながらないと考えたからです。結果から言えば、惜しくも優勝逃してしまいましたが、真剣勝負の中で優勝候補を倒しての予選リーグ通過は、良い意味で自信をつけてくれたようです。さて話は変わりますが、実は今回の遠征を行うにあたり、チーム内で「まだ早いのではないか?」「仕事が休めないかも」などの声が上がっていたのです。しかしながら、その選手たちも帰りに、素晴らしい笑顔をしていました。自分の経験では無いことをやってみると言うのは、勇気が要るものです。しかし、行動起こさず、小さくまとまってしまう人が多いのではないのでしょうか。私はラグビーを通じ若い世代と交流を持つ人間として、その時こそ有給を与えてあげるのが、人生の先輩諸氏の大切なことではないかと考えます。ラグビーワールドを通じて今回の遠征が、そのような可能性を秘めたは若者たち、そして大人達の勇気につながることを願って、遠征総括させていただきます。



BLUE SOCKS

1998

バックスリーダー

伊藤 健

BK Leader

カナダに遠征し、海外の人と交流を持った事は、私にとって非常に貴重な経験となりました。まず感じた事は、外国の選手を見てラグビーというスポーツが、生活の一部として入り込んでいて、そして誰もがエンジョイしているということでした。それでいて、本当に一生懸命にラグビーに取り組んでいました。実際に対戦したチームには、バミューダ代表やカナダ代表のメンバーが含まれていました。これは、日本と違って、代表チームとクラブチームが、綿密な関係にあってこそで、代表という目標があるからだと思います。日本でも、一刻も早く諸外国チームと同様のシステムが確立できればクラブラグビーのレベルが格段に上がるでしょう。それには、日本ラグビー、日本のクラブラグビー、そしてクラブチームを支えるラガーマンの意識改革こそが、実現への第一歩と考えております。

主役たちへ。今、できることから始めよう！

ひと通り、ブルーソックスのカナダ遠征の様相、そして首脳陣の熱意をレポートしてきました。当初、今回のクラブ進化論を進めていく上でブルーソックスにご協力を呼びかけたところ、快く承いただきました。そして、クラブラグビー発展という共通の目的のために、カナダ遠征中はもちろんですが、その前後にわたりこれまで数十回にわたりミーティングを重ね合い、お互いの意見と意思を確認してきました。今回をいい例に、クラブラグビー発展のためにはクラブラグビー、クラブチームの関係者の間で、もっともっと話し合いの場を設けることが、1番求められていることではないでしょうか。そのためであれば私はいくらでも協力していきたいと考えていますし、それこそ前向きなご意見であれば、また以前のようにクラブチームのページを復活させていきたいと考えております。カナダ遠征に同行させていただき、1番実感した事は、ブルーソックスのメンバーもそう感じていたようですが、世界のクラブラガーマンは本気でナショナルチームのメンバーになりたいと考えていることです。文化やスポーツ体系の違いはありますが、現在日本のクラブラガーマンの中で、目指しているでしょうか？たとえ、その気持ちはあっても道はないのでしょうか。なぜサッカーには天皇杯という形で高校生やクラブチームが、Jリーグのチームに挑戦する機会があるのでしょうか。それは、やはりクラブラグビーが別のものとして考えているからです。今、日本の女子ラグビーは岸田則子専務理事を中心に、着実に前進を遂げています。1988年の連盟設立以来、苦節10年を経て、昨年ようやく日本ラグビー協会の関連団体として認められました。しかし、それでも企業からの資金や援助は一切なく、女子日本代表チームの海外遠征に係る宿泊費、交通費等は、各チームが協力しあいパザーを開催し、そこから捻出すると言う涙ぐましい努力があります。そう！ラグビーを愛する気持ちは男性でも女性でも同じこと。ラグビーを楽しみたい、上手になりたいと言う思いが彼女たちの飛躍の原動力となっています。

それでは何が言いたいのか？

私の意見としては、まずクラブラグビーが認められるには、日本代表に選ばれるような選手が出てくるということ。これには魅力があつて、コンセプトのしっかりしたクラブが増えることが大前提です。方向性が強い大学チームで、大学生が世界に通じるラグビーを目指し一流企業でラグビーをしたいと思うように、このクラブチームならば自分のラグビーを全うできると思えるような、チームがどんどん出てくるのが大切です。しかしそれだけでは単なる請け負いに過ぎません。ラグビーのスキルとともに人間的にも成長できるクラブにしていかなければ、双方、長続きはしないでしょう。昨年、ブルーソックスには関東大学対抗戦上位校のレギュラー2名が入部を希望してきましたが、入部をお断りしたそうです。なぜならばチームの日本一になるというコンセプトと彼ら2名の息抜きのためのラグビーという考えに隔たりがあったからです。亀龍監督は「正直、喉から手が出るほど欲しかったです」と笑っていました。これまで今回のようにクラブ改造計画のようなものが、どっかにあったかどうか判りません。しかし私は今、クラブラグビーにエールを送ります。こんなちっぽけな言葉では、真意は伝わらないと思いますが、本当に大変なことかもしれませんが、少しずつ進化していければと思います。もちろん私たちだけではどうしようもなく、主役である皆様のご意見が根幹となる事はいうまでもありません。文中で御無礼な表現がありましたことを詫言しますが、きっと本当のラガーマンならば賛同してくれると願っています。熱いメッセージを期待します

